

2020年11月8日 礼拝説教要旨

詩編講解説教35「魂を取り返す」

詩編35：17～21、ヨハネ20：21～23

詩編第35編の詩人がダビデであるということを考えますと、ダビデはサウルの激しい敵意、憎悪の的になっておりました。その敵意は人気のあるダビデに対するサウルの妬みが原因でありまして、ダビデにしてみれば言われのないものであり、理由もなく攻撃されるという甚だ理不尽なものであります。心当たりもないことで攻撃され、一方的に断罪されるというのは非常に辛いことです。

19節「侮りの目」とありますが、これは原文では「片目をつむる」という言葉です。ある注解書では「目配せをする」という説明があります。誰かと結託し人を陥れて、それを楽しむようなことであります。また21節「この目で見た」というのは、「見たぞ、見たぞ」と囁し立てる様子です。誰かの失敗を見て、それを冷やかしたり嘲笑する様子です。それで優越感に浸るのです。このような状況というのは、例えば、今日で言うところのいじめや、パワーハラスメント、虐待、DVのようなことでしょう。残念ながら、世の中にはそういうことが日常的に起こります。もちろんそれはそういう暴力を振るう人間の問題なのですが、一方でいじめを受けた人が、それで傷つき、悩み、心病んだり、場合によって自ら死を選ぶということが起こってしまう。これだけ世間を騒がせ、社会問題になっているにもかかわらず、なぜそういう事件が後をたたないのか。その根底にはやはり罪の問題があります。聖書で言うところの罪というのは神さまから離れることですが、神さま不在の人は、自分が神になり人を支配しようとします。自分が絶対であり、それに従わせようとする。自分の思い通りにならないと攻撃する。地位や立場を利用して人を支配するのです。

この支配が非常に厄介なのです。虐待やDVの問題でよく聞くのが、暴力を振るう相手から逃げられないという話です。なぜ逃げないのか。そこには一種のマインドコントロールがある。相手に心を支配されてしまう。逃げられる状況でも、心を支配されているがゆえに逃げられない。それが被害者の典型的な姿だと言います。そしてこの詩人もまた、このような支配に捕らわれるという経験をしています。「彼らの謀る破滅から、わたしの魂を取り返してください」(17節)

ここに「魂」とあります。これは詩編でもよく出てきますが、ネフェシュという言葉です。天地創造の物語で、神さまが人間をお造りになられた時に「その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」(創世記2：7)とあります。この「生きる者」という言葉がネフェシュ、魂と訳された言葉なのです。これはもっとも根本的な人間存在のことです。魂を取ってしまったらその人ではなくなるという部分です。神さまが命の息を吹き入れて、そこに魂が入る。そこには唯一無二のわたしという存在があるのです。

ところが、他者の攻撃によって、この魂を支配されてしまう。先ほどのいじめやハラスメントもそうです。それによって罪に魂を掴まれ支配されてしまうのです。そうするとその人は自分を失ってしまいます。確かに暴力を受け続けることで人は人格を歪められ、自分を肯定できなくなってしまう。これも魂を支配されてしまうことなのでしょう。このコロナ禍も魂を支配し人を歪めてしまう悪魔的な策略だと捉えることもできます。「彼らは平和を語るこ

となく、この地の穏やかな人々を欺こうとしています」(20節) 平和を語らないということは、好戦的で、言いがかりをつけては対立を煽るようなことです。今、世界はどこかそういう対立、分断に支配されているように感じます。そのようにして人は魂を支配され破滅の道を進むのです。

では、人はどのようにしてこの魂を回復することができるのでしょうか。言うまでもなく、この魂を罪の支配から取り返すためにイエス・キリストが来てくださいました。何よりご自身が罪の支配にあるわたしたちのところに、その只中に入れられ、そこに捕らわれているわたしたちの魂を担われました。それが十字架の死であります。十字架の死もまた人間のあらゆる憎悪が渦巻き、暴力が凝縮されたようなところ。「無実なわたしを憎む者が侮りの目で見る」(19節)「大口を開けて嘲笑い」(21節) この状況をまさに主イエスはあの十字架で負われました。人々の暴力と嘲りの中で主は死なれたのです。

けれども、それは敗北ではありません。罪に捕らわれている魂をその支配から取り返されるために主は自ら十字架を負われたのです。そしてわたしたちが魂を取り戻し、自分自身を取り戻して、御前に回復されるために三日目によみがえられました。ヨハネ福音書によみがえりの主が弟子たちのところに現れた話があります。彼らは平和を作り出す者として新しく遣わされます。そのために主イエスは弟子たちに息を吹きかけて、聖霊を受けよと言われる。そのことが、神さまが人間をお造りになられた時に命の息を吹き入れられたこととつながります。罪に奪われた魂を主は取り返され、さらには聖霊を与えて、傷ついた魂を癒し、回復される。新しくしてくださるのです。

わたしたちも言われのない差別や偏見に苦しむこともあるでしょう。いじめや様々なハラスメントを受けることもある。わたしは今日の御言葉を読みながら、父のことをまず思いました。教会が社会問題に巻き込まれ、勝手に体制側だというレッテルを貼られ批判されました。父は大変苦勞しました。そこには暴力がありました。幼心に憶えています。当時学生運動が盛んでした。教会にヘルメットをかぶった学生たちが乗り込んできて礼拝を妨害する。クリスマスイヴの晩に松明を灯したデモ隊が家の周りで集会をしたり、石を投げたりしました。街宣車が家の周りをぐるぐる回っていたことがありました。今の時代であれば大変なことです。人権侵害も甚だしい。そこを父は耐えました。普通なら人格が崩壊してしまっても不思議ではないでしょう。もちろん父も終始穏やかだったわけではありません。でも魂を取り戻し、自分を保ち、牧師の務めを全うできたのは主が共におられたからです。キリストこそ癒し主であり、魂の回復者なのです。今、この時もいじめや差別、偏見に苦しむ多くの人たちがいます。その人たちがキリストに出会い、魂を取り戻し、平静を保ち、救われることを願います。